

# 体で覚えるものづくり

## 職人・西須殉治さんが教えてくださったこと

長年にわたり鼓童で使用している太鼓の台や舞台道具を作ってください、研修生もご指導くださった指物職人の西須殉治さんが、今年8月に永眠されました。ものづくりを通じて、どんなことを鼓童に伝えてくださったか、見留知弘に話を聞きました。

聞き手・構成 ● 千田倫子、洲崎純子

### ものづくりに魅かれて

西須さんは鼓童ができた頃にバチづくりでお付き合いが始まったそうですが、私が西須さんの工房に伺うようになったのは九六年くらいからでしょうか。大太鼓のバチを重い材で作りたいと思った頃からです。それまで主流だったヒノキよりも重くて硬いタモやケヤキのバチを試したくて西須さんの所に持ち込み、相談しました。私も工業高校出身なので自分の手でものを作ることにすごく興味があつて、必要と思うものは手作りする、それも材料をわざわざ買うのではなくて、すでにあるもので何とか工夫して形にすることが好きです。ただ、鼓童の舞台で使う太鼓を載せる台などは、主にケヤキのため自分達の手で負えるものではありません。こんな風になりませんか？と欲しいイメージを相談し、どんな難しいリクエストも見事に形にしてくださいとさるパートナーが西須さんでした。演奏者の身長に合わせて大太鼓の台や、太鼓の打面の微妙な角度を調整できる台、三宅の台は強度まで工夫してくださいだったり、あらゆる注文に応じてくださいました。

### 西須さんの流儀

十年ほど前に研修生にバチ作りを教えていたスタッフの佐藤隆司さんから、私が指導を引き継ぐことになりました。その時に「ものを作るためには、作る道具からしっかりと手入れできないと駄目だ」という

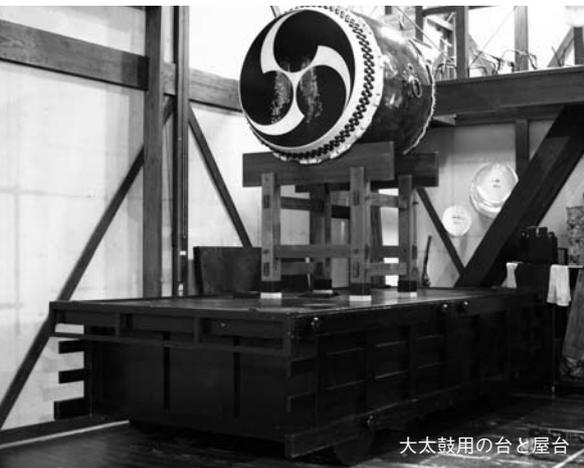
話になり、毎年四月に西須さんに研修所に来ていただいて、鉦の刃の研ぎ方やバチ削りを教えていただくことになりました。当時、私も研ぎは未経験だったので、この時間に立会い、研修生と一緒に習いました。

西須さんの指導は、「まあとにかく研いでみる」という感じでした。まず自分で経験しなきゃ駄目だ。力づくで研いで、逆に削れなくなることも勉強。どういう状態だと刃があるということなのか、無いことなのか。「この違いが分かるか、触ってみろ」と。それは言葉では教えることのできない、自分の感覚で覚えて行く職人さんの世界でした。西須さんはどつしり構えて研修生や私達に付き合ひ、多くのヒントを与えてくださいました。

西須さんから教わったもうひとつには、「効率を求めよ」ということでした。色々な注文に対応するために、鉦は粗削り用と中間用、仕上用を常備されていました。三つ準備しておくことで仕事が早いと分かり、それ以来、私も二つは持つことにしています。私達はバチのような丸いものしか作らないので、「極端に言えば刃の真ん中が研げていればいいんだ、効率良くやれた方がいい」とおっしゃり、職人さんの考えと

いうのも学びました。西須さんは指物職人ですが、太鼓の台を作る時は、あんまり図面を引かないという





大太鼓用の台と屋台



平胴太鼓用の通称「ぞう足」



「屋台囃子」用の台



「三宅」用の台

### 西須さんが手がけた 舞台道具の数々

か、その時によって気持ちで作っている感じがありました。なので正直に言えば、古い台とサイズが合わないこともあったんですけど。でもそこが西須さんらしさのような気がしていました。三宅と屋台囃子用の台は型を取っていたようですが、それ以外は、たぶん毎回、頭の中で組み立てていらしたみたいです。

何か問題が出た時は、羽茂町の工房に伺って、ああでもない、こうでもない、と相談しました。私達の要望に熱心に耳を傾けてくださったこと。西須さんという職人さんの懐の大きさに、本当に長い間、甘えさせていただいた気がします。

西須さんが、以前に体調を崩されて仕事ができなくなつた時、他の職人さんも探してみたのですが、やっぱりここまで鼓童のことを分かってくれた色々な工夫をしてくださる方とは出会えなかつたです。私達の無理な注文を「またまたあ〜」と言いながら、何でも面白がつて受け取めてくれて、それを形にしてくださる方でした。

ある時、西須さんの技術を「僕に少しづつ教えてもらえませんか」と聞いたたら、「今の時代、もうこれは商売にならないからそれはできません」と言われてしまいました。機械を使わないと作れない部分があるので、そう簡単に習得できるものではないですが、ちよつとずつお手伝いさせてもらいながら勉強していきたいと思つていました。こんな立派な職人さんの仕事が絶えてしまうのかと本当に残念に思います。今思えば、もつといろいろなことを聞き取ったし、習いたかつたです。

### 大事にする心から生まれる音

西須さんがおっしゃつていたこと。

「太鼓は素晴らしい芸術品。だからその太鼓に負けない存在感のある台を作りたいたい」。その気概が、使い易さを兼ね備えつつも太鼓にも負けない素晴らしい太鼓台を生み出したと思います。

これは研修生も実感していることだと思ひますが、自分が作つたバチは、どんなに凸凹でも愛着があつて大事にしようという気持ちが生まれます。なので折れた時のショックといつたらありません。同じように太鼓や台も、職人さんの気持ちが注がれたものです。でも普段、当たり前にあるものと勘違いして、感覚が麻痺してしまつていないでしょうか。鼓童に数ある太鼓は個人の物ではないし、でも誰でも叩ける。稽古場だつて何時でも使える。でも、そうしたことは世間では当たり前ではありません。鼓童初期には太鼓や台を手に入れることは本当に切実だつたでしょう。そこが出発点だから先輩方はものを大事にする心を持ち続けています。もの心があればこそ、太鼓は音で返してくれるものと思ひます。

鼓童の稽古場にある太鼓や楽器、道具などあらゆる物が職人さんの使い手への思いと技術の結集です。西須さんの作品群と共に、ものを大事にする心を、次世代に伝えていきたいと思つています。

十一月三日、鼓童村にて



西須殉治(さいす・じゅんじ)さん  
(享年六二)

指物職人。同じく職人でいらつしやるお父様の西須政稔さんと親子で、舞台道具だけでなく、鼓童村の入口にある切り株で作つた表札食堂のテーブル、お盆など、数えきれないほどたくさん物を作つていただきました。

西須さん亡き後、政稔さんが写真の太鼓と台を、鼓童に届けてくださいました。

「殉治が十年ほど前に作つた桜の胴の太鼓です。どうぞ鼓童さんで使ってください。」

天国から鼓童に贈られた太鼓。その驚きとこれまでへの感謝の気持ちを直接伝えることは叶いませんが、皆で打ち込んで、太鼓の響きでお返ししたいと思います。

